

材料をもとにした造形遊びの授業

— 第4学年「カラータイと遊ぼう」の実践を通して —

加藤 潔 己

1. はじめに

改訂された新学習指導要領に基づく新しい教育は、子供達一人一人が、心豊かに、主体的、創造的に生きていくことができる資質や能力の育成を目指している。これからの教育は、このような豊かな資質や能力を学力の基本とする学力観に立って学習指導が展開される必要がある。図画工作科の学習指導要領は、小学校教育全体の趣旨をうけて、造形的な創造活動を通して、社会の変化に主体的に生きていく資質や能力を目指して改訂されたものである。したがって、図画工作科の授業は、一人一人の子供のよさや可能性が活かされ、創造的な想像力などを発揮することができるような新しい学力観に立った学習活動が保障されなくてはならない。そして「子供の側に立った学習活動」が展開される授業でなければならない。

これまでの教育においては、教師が中心になりながら知識や技術などを教え込み、子供達が受身のかたちでそれを受けさせる指導に陥りがちであったように思われる。新しい学力観に立つ教育においては、子供が自ら考え、判断し、表現や行動ができる主体的な能力や創造性の基礎を培うことが求められている。つまり、子供一人一人がもてるよさや様々な可能性などを発揮しながら進んで学習活動を展開し、このような能力などを自ら獲得し、身につけるようにする必要があると考える。

そこで、新しい学力観に立つ図画工作科の授業を次のような観点に立って構成することが必要であると考えられる。

- ①授業に、児童一人一人への温かい思いを寄せたさわやかな提案を多く含める。
- ②授業は、児童たちのリズムやペースを進める。
- ③教師自身の創造的な生きがいにかかわるような夢や願い、冒険心などを授業に織り込む。
- ④児童一人一人が進んで問題の場に立つようにする。
- ⑤児童が主体性を発揮して活動する場を広げる。
- ⑥児童の豊かな育ちのための時（ゆとり）をつくり、児童の思考や試みなどへの共感のタイミングを考える。
- ⑦児童の心身の自然な緊張とリラックスの調和のとれた雰囲気をつくる。
- ⑧児童が自ら確かめる場を設ける。
- ⑨幅のある共感的な認めをする。
- ⑩児童に自分の考えや試みなどのよさが分かるようにする。

2. 個が生きる授業と評価

(1) 個が生きる授業

個が生きる図画工作科授業とは、本校では以下のような授業であると考えている。

○一人一人の児童が、自分の思いでいろいろ試み、広げ、ふくらませていくことができる。

○集団で認め合い、深め合う中で、多様な価値を知り、自分なりの表現が広がる。

また、このような授業を目指すには次のような条件が必要であると考えている。

- 1 個々の児童が、多様に表現できる題材（選択の幅のある題材）が設定されていること。
自分の思いがかなえられるような場が保障されていること。
- 2 主体的な造形体験をもつ場があること。
- 3 材料との出会いの場で個々の児童がはっきりとしためあて意識を持っていること。
- 4 児童の新たな工夫や試みを、認め合い、深め合う集団であること。

(2) 評価について

○評価は、児童一人一人の意欲を高めるような支援・援助の形で行う。

○学習活動を効果的に行うため指導の一環として行う。

○豊かな感性を育成する視点で、児童をまるごと評価する。

(3) 自己が高まる評価力の育成

子供にとっての評価は、自分自身の考えや試みのよさに気づいたり、他者の見方、考え方のよさを吸収したり、自分の考えを他者の評価から自らを修正したり、めあてを深め、あるいは広げていくことを可能にするものでありたい。また、それによって、新しい課題に進んで挑戦する意欲につながり、豊かな自己実現に生きて働く力の育成につながるものでありたい。

3. 研究仮説

本年度の研究では、昨年度の「個が生きる図画工作科授業」の条件を受け、次のような研究仮説を立てた。

研究仮説

- ①材料との出会いの場で、はっきりしためあて意識の形成がなされたなら、児童は主体的に造形活動を展開していくであろう。
- ②造形活動の過程において、自分の思いがかなえられるような活動の場、多様な試みや工夫が認められる場が保障されたならば、児童は主体的に造形活動を展開していくであろう。
- ③児童相互が認め合い、互いのよさに気づく場を設定したなら、児童の自己認識、自己評価力を高めていくことができるであろう。

4. 指導事例 第4学年 材料をもとにした造形遊び 「カラータイと遊ぼう」

(1) 題材について

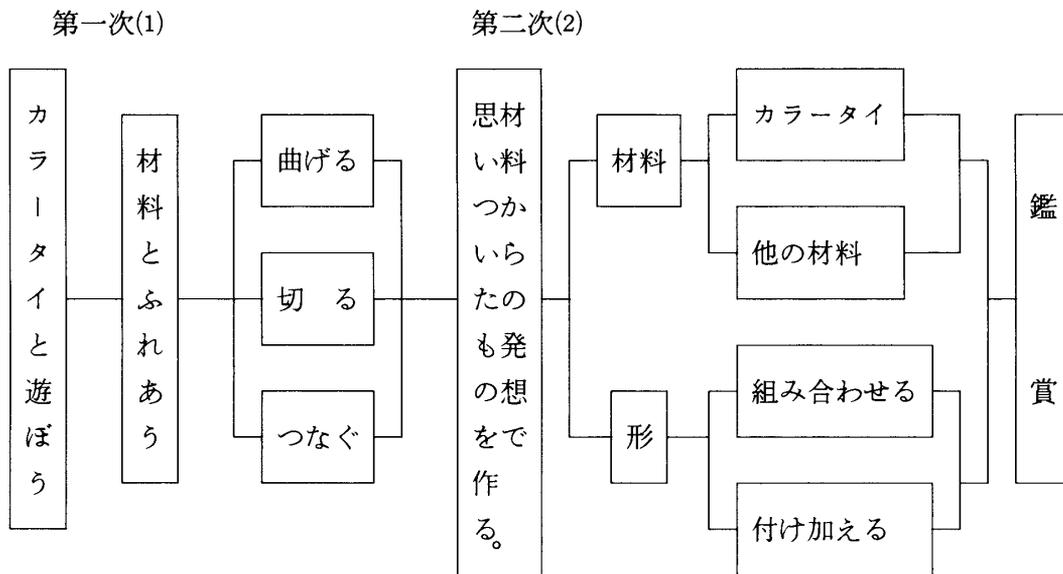
カラータイは細い針金に帯状のビニールをコートしたもので、いろいろな色があり、菓子などの食品の袋の口を止めたり、電気コードなど長いものを束ねたりするのに使われているものである。このカラータイは、曲げのばしが自由で加工しやすく、色も美しいので子供達が興味・関心を持つ材料であると考えられる。本題材は児童が材料と出会い、思うがまま自由に手を加えていくなど、試行錯誤する中で自分なりの思いを持ち、テーマを見つけ、それを発展させて行くことをねらいとする。

本学級の児童はこれまでに、たまごケース、透明カップなどのさまざまな材料とふれ合い、その材料から発想して、手を加え新しい形を作るなど自分の思いで意欲的に造形遊びをしてきた。しかし自分の思いを持ちながらも、それを広げることができない児童もいる。一つの材料から発想したものを、他の材料と組み合わせるなどの活動をすすめて、表現の広がりを持たせるようにしたい。

(2) 指導目標

- 1 材料から思い付いた造形遊びを思いのまま楽しむことができるようにする。
- 2 材料に進んで働きかけ、多様な試みができるようにする。
- 3 友だちの活動に学び、互いに認め合う態度を養う。

(3) 指導内容と計画 …………… 3時間（本時 第一次第1時）



(4) 授業設計の焦点

子供達がしっかりとしためあて意識をもって、主体的に活動してゆくためには、まず材料とのふれ合いの場で、じっくりと手でふれ、心で感じる事が大切であると考えられる。カラータイを思うがままに手にし遊ぶ活動の中で一人一人が自分なりのイメージを持ち、ふくらませ、発展していけるように援助したい。また次の時間に向けて「欲しい材料、もってきたい材料」を考えさせることで、活動の見通しをもたせ、自分の思いの実現を求めようようにさせたい。

(5) 本時の目標

材料に進んで働きかけ思いのままに造形活動を楽しむことができるようにする。

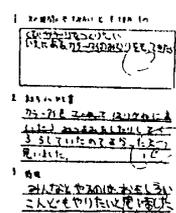
(6) 準備

(教師) カラータイ、ペンチ、発泡スチロール、針金、ひも

(7) 評価の観点

造形への関心・意欲・態度	自分の思い付いた活動を楽しんでいる。
発想や構想の能力	新しい思い付きや試みをしようとしている。
創造的な技能	材料の特質を生かして工夫しようとしている。
鑑賞の能力	友達の発想のよさを見つけようとしている。

(8) 指導過程

学 習 過 程	指 導 上 の 留 意 点	児 童 の 反 応
<p>1</p> <p>カラータイの特質について知る</p> <pre> graph TD A[カラータイの特質について知る] --> B[結合] A --> C[切断] A --> D[色] </pre>	<p>1 つなげ方、結び方及び切断の仕方について知らせる。</p>	<p>3年で経験した針金の造形遊びを思いだしている。</p>
<p>2</p> <p>カラータイで思い付いた活動をする。</p> <pre> graph TD A[カラータイで思い付いた活動をする。] --> B[思い付き] A --> C[材 料] B --> D[発見] B --> E[工夫] C --> F[用具] C --> G[技法] </pre>	<p>2 活動を意欲的に行わせるため以下の点に留意する。</p> <p>◎いろいろな試みをすることを賞賛する。</p> <p>・友達と共同で作りたいグループがあれば認め、一人一人の思いが活かされるように配慮する・新しい発想や、よい工夫があればその場で取り上げる。</p>	<p>配られたカラータイを手に取り、自由に曲げ、捻り、伸ばしてみる。</p> <p>すぐに、グループを作りたいと言う児童が多い。</p> <p>グループを作り、互いに関わりながら、作り始める。</p>
<p>3</p> <p>学習を振り返る。</p> <pre> graph TD A[学習を振り返る。] --> B[自己評価] A --> C[他者評価] B --> D[次時の活動] C --> D </pre>	<p>3 本時の学習を振り返り、次時への見通しを持たせるために</p> <p>◎図工カードに次時に必要なものを書かせる。</p> <p>◎友達の活動のよさに気付くよう評価項目に「友達に一言」の欄を設ける。</p>	<p>図工カードへの記入。</p> 
<p>4</p> <p>後片付けをする。</p>	<p>4 協力して片付けさせる。</p>	



5. 考察

検証方法として、次のことを考えた。

授業観察をもとに同一児童の題材との関わりを検証
 図工カードや感想を整理し検証



研究仮説①について

「材料との出会いの場で、はっきりしためあて意識の形成がなされたなら、児童は主体的に造形活動を展開していくであろう。」について

本学級の児童は3年生の時、針金をもとにした造形遊びを経験している。この経験を想起させることで、児童はカラータイの持つ可能性と、さらに装飾性を知り、即座に、活動に移ることができた。

本題材は児童が材料との出会いの場でじっくりと手でふれ、心で感じる事が大切であると考えた。カラータイに思うがまま自由に手を加えていくなど、試行錯誤する中で自分なりの思いを持ち、ふくらませ、発展していけるように考えた。その点、児童がすぐにカラータイから「こんな物を作りたい。」と言うめあてを持たなくとも、カラータイにしっかり関わることができることが大切であると考えた。



研究仮説②

「造形活動の過程において、自分の思いがかなえられるような活動の場、多様な試みや工夫が認められる場が保障されたならば、児童は主体的に造形活動を展開していくであろう。」について

造形遊びにおいては、「してはいけません。」という、活動を制約することをできるだけ少なくしたいと考える。「これ以外は全部していいです。」という多様な試みが認められることを大切にしたい。友達との共同制作を認めたことで、児童は多様な試みで、いろいろな工夫をすることができたと思われる。

一人の児童（M君）の活動から

M「友だちとやってもいいですか。」

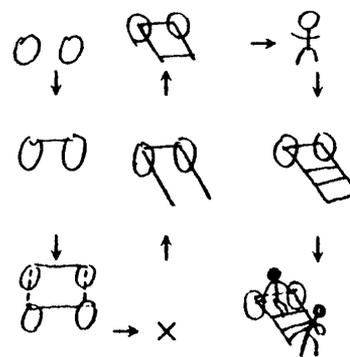
T「いいです。」

M即座に自分の席を移動。7名のグループを作る。

- ・ベンチを持って来る。
- ・「乗り物を作ろう。」
- ・「先生、画用紙を下さい。」
- ・Y君を見て、「おー、自転車になるん？」
（Y君への承認による学び）
- ・自転車できず、U君の自動車を見て挑戦。
- ・人力車になる。それを改造。人を作る。

「できた。ちょっとおかしい人力車、人力マンじゃ。」

M君の作品の変化



研究仮説③

「児童相互が認め合い、互いのよさに気づく場を設定したなら、児童の自己認識、自己評価力を高めていくことができるであろう。」について

友達の活動のよさに気づくよう、授業の終末で使う図工カードに「友だちに一言」の欄を設けた。

児童は友達の活動のよさにふれ、認め合うことで自分の活動を振り返り自らを見つめることができたようである。先のM君についてのカードの記述をあげると、M君は、Y君に「M君は、タイヤを作るのが上手だった。」と書かれ、自らは「自転車やいろいろなタイヤを作るのがむずかしかった。」と記している。M君の取り組みからすると、できた喜びに支えられた「むずかしかった」であり、それだけ活動を振り返り自らを見つめているものと推察できる。また、乗り物にこだわり続けたM君のよさに気づくY君のよさも読み取れる。

図工カードに、次時の活動に向けて「欲しい材料、もってきたい材料」を記入する欄を設けた。

次の活動への材料の見通しが持てることは、本時の自分の活動を振り返り、新たな学習のめあての設定や活動につながると考える。

児童のカードの記述から

「より多くのカラータイが欲しい」「いろいろな色のカラータイを持ってきたい。」（15名）

「本時で用いたもの以外の材料を持ってきたい。」として糸、箱、モール、綿、折り紙、紙テープ、毛糸などがあつた。（12名）カードには書かれないが、他の材料と組み合わせず、カラータイのみで作りたいたいと言う児童もいる。

6. まとめ

カラータイという簡単に形を変えられる材料自体が、4年生という発達段階に対して教材として発展性があるかどうか、課題になった。ただ与えるのではなく、造形活動として発展性のあるものにする取り組みが必要であると思われる。また、真に子供達にとって、主体性、自主性、感受性、さらに、表現力、創造力、想像力、直感力、独創力、忍耐力を求められる、つまり人間形成を求められる題材の開発、授業づくりを追求して行きたい。

児童の活動の様子



参考引用文献

小学校 図画工作指導資料 指導計画の作成と学習指導（文部省）